

哲學研究

第九十九號

第九卷
第六冊

ヘスタロッチーの宗教々育

小西重直

ヘスタロッチーの教育思想の全體は自我活動を以て始終して居る。彼にありては自我活動は單なる自發的衝動ではない。目的を設定し目的を遂行する自律的な内面的法則の生活である。自我夫れ自身であるのである。

自我活動を斯様な意味に解釋したる彼にありては其宗教觀が道德生活と不可離の關係に立つたのは自然である。彼は其名著リエンハルド及ゲルツルドの一節に神は人間の爲めに、人間によりて、人間の神であるといつて居るのは彼の熱烈な人間愛に基く所の宗教的道德觀を示して居るものである。(1) 人の生活は渴仰努力の

生活である。自己内面の統一、自己と客觀全體との統一の下に内面生活の靜平を得んとする渴仰と努力の生活は神の信仰によりて初めて内面の保證を得るのであるが、神の顯現は又自己の道德生活の所産である。永遠の生活は自己自身より自己自身によりての所産である。結局人生は自己を自己自身によりて永遠にすることである。そして彼は自己自身を永遠にする道程に關し道德生活と神の顯現の關係に就て次の様に述べて居る。

純なる自然人としての生活、墮落せる自然人としての生活、外面的な社會生活、及内面的な道德的生活、此四つの生活過程は道德生活の發展の順序であり又宗教生活の發展神の顯現の道程である。

純なる自然人としての生活とは單純で、そして人に迷惑にならぬ様な純なる本能の感覺的享樂の生活である。此状態に於ては本能的な厚意によりて其妻子を愛し其犬や馬を愛護する麗はしき心持が見らるゝのである。斯かる生活は個人に就て言はゞ母體より生れた瞬間の赤子の様なもので人間種族の發達過程に於ても決して永く續いたものとは思はれない。併し吾々は母の胎内に於て仮りに片腕や片脚を失つたとした事實がある場合にても、此腕や脚を完全に具備することが出来るど

思惟する能力を有して居る様に、一度失はれた此純なる無邪氣な自然人としての生活状態を考出たす所の力を有して居ると言つて居る。そして此無邪氣な生活相は吾々が纏がて進まんとする目途を暗示するものであると説き、自然に歸れとのルン
 一の思想より洗禮を受けたかの様な氣分を見せて居るが、彼は無自覺的な自然人其儘の状態を理想として居るのではない。純なる無邪氣な自然生活に次て起る所の
 二段三段の過程を経て内面的な道德生活に達しようとして居るのである。

純なる自然人の次きに起り來る第二段の發達過程は墮落せる自然生活である。
 自然の無邪氣な状態より遠かり、本能的な厚意の心も薄らぎ、偏に自己保存の慾望の生活に走り、第一期の素朴的調和の状態が掻き亂たさるゝのである。朝顔の蔓は幾度下方に振向けられても常に上の方に伸び上からうとする様に、人々は決して自己保存の慾望や際限なき個人的享樂にのみ捉はれて居るものではない。斯様なあさましき生活は不義不正であることに目覺め、是に第三期の發達過程として外面的社會生活を作ることになるのである。即ち自己保存の爲めには所有の増大を圖ると共に此作業を保護せん爲めに社會的規制や契約を設定し、我慾と厚意の妥協を見んとするに至るのである。此處には人々相互の間に相當の道德的生活も表はれて來

るのであるが、夫れは自己保存の慾望を比較的完全に満足せんとする動機に基くもので眞實の道德生活ではない。道德的技術ともいふべき外面的な法規の生活である。然るに吾々の自我活動としての自律的な内面生活への渴仰は斯様な外面的の社會生活では満足することが出来ない。是に内面的な共存生活の基礎として眞實な純なる道德生活を要求し來たるのである。

ベスタロツチーの説く所によれば、純なる道德生活は動物的な慾望や外面的社會生活より獨立し、自己内面の向上の生活、内面の尊嚴の生活である。道德生活は人間性の他の方より導き出たさるゝものではなく、夫れ自身獨立である。人間性の最も純なる本質である。自我ある爲めに道德生活があり、道德生活がある爲めに自我があるのである。自我即道德生活であり、道德生活即自我であるのである。此點に於ては彼の思想はカントの夫れに酷似して居るのである。

要するに自我活動としての自律的な内面生活には以上四ツの發達過程があるのであるが、第一期の純なる自然人としての生活及第二期の墮落せる自然人としての生活は其状態に於て異なる點があるけれども、自然人としての生活に於ては同様である。即ち彼等は何れも世界は自分達のみの爲めに作られたる動物であるとポン

ヤリと想像して居るのである。次に社會人としての生活に於ては人々は世界といふものは外面的な規制や契約によりて成立する所の生物であると考ひ、道德人としての生活に進みては、世界は吾々の内面生活を貴くする爲めに存在するものであると信するのである。自然人の生活は主として本能の生活であり、社會人の生活は現實の外面的な社會的關係の生活であり、道德人としての生活は良心の生活であり、純なる自己自身の生活である。自然人としての生活は素朴的な自己完成であり、社會人としての生活は自己完成の不可能なる状態に於て強て安心しようとして居るのである。そして道德人としての生活に於ては自己完成への渴仰と努力とである。吾々は次きに徳性の發展に應じて如何なる宗教生活が表はれ來たるかに就て、彼の所論を見ようと思ふ。(2)

徳性發展の最初の階段としての素朴な自然生活に於ては未だ宗教的生活は表はれて居らない。其第二期の階段としての墮落せる自然生活に於ける宗教は虚妄なる宗教である。第三期の外面的社會人としての生活に於ける宗教は欺かれたる宗

教である。そして最後の第四期としての内面的な道德生活、眞實の自己の生活に於ける宗教こそ眞理の宗教であるのである。

虚妄の宗教は動物的盲目的な自然人の間に表はるゝ所の迷信である。彼等の神は自然其ものである。外面的社會人としての生活に於ける欺かれたる宗教は自己の内面の自覺より起つたものではなく、外よりの強制である。一國內に於ける國教の様なものである。國教は國民が自分達で作れる關係の奴僕である。此關係の中心ともいふべき國家の權力の奴僕である。神は元來無限なものである。個人々々の神は其人々の人間性の反映である、情慾を追求する人の神は情慾の神であり、暴威を逞ふする人の神は暴力の神であり、自然人の神は自然其ものであり、外面的社會人の神は外面的規制の下に自己の物慾を遂ぐるに都合のよい神であり、純なる道德人の神は愛であり、智慧であり、親心であり、眞理である。(3)

三

良心を自然の聲、神の聲と信じたルソーはドグマの宗教を退けた。所謂市民的宗教を無意味のものと痛罵した。基督教國に生れたものは傳統的習慣的に基督教信

者となり、回々教の國に生れたるものは生れながらにして信者の仲間に入籍す。巴里に生れたものは基督を信することを強いられ、コンスタンチノーブルに生れたものは回々教を奉ずることになる様な地理的宗教乃至市民的宗教は之れ皆強制的宗教であると論じ、盡く此を退け去り彼の所謂人間の宗教を唯一眞正の宗教となしたのであつた。ペスタロツチも亦虚妄の宗教、欺かれたる宗教、眞理の宗教の三つを擧げ眞實の宗教は道德人の人間性の反映としての眞理の宗教、眞實の自己の宗教であると斷じたのである。併し革命思想家としてのルソーと教育者としてのペスタロツチとは其不眞實の宗教に對する態度は非常に異つて居るのである。ルソーは眞實の社會に即する子供の世界をはなれ、子供其ものゝ自然性に基き、ペスタロツチは眞實の社會に即する子供の世界を發達的に見て居るのである。此意味に於てはルソーの自然は理想の自然であり、ペスタロツチの自然は理想と眞實の統合體としての自然である。従つてルソーはドグマの宗教や市民的宗教の價値を否定して此を退け去らんとしたのであるが、ペスタロツチは之れに反して虚妄の宗教や欺かれたる宗教に對しても相對的の價値を認めて居るのである。眞理の宗教に達するに欠くべからざる過程と見て居るのである。自然人に對しては虚妄の宗教以

上のものを望むことは出来ない。外面的社會人に對しては強制的な、欺かれたる宗教以上のものを期待することは不可能である。内面的自覺の發達せざる子供の世界に於ては感覺的なものや、外より習慣付けらるゝ事は避くべからざる必然である。之れに對して自覺的な宗教を望むは非教育的であり非人道的であり、不自然なことである。此故にルソーにありては宗教々育は人間自覺の初期としての青年期に於て初めて施し得るものとなされたるに反して、ペスタロツチにありては母の胸や父の膝に於ける幼兒の時代より宗教々育が可能とされたのである。

ルソーは人は認識的に神を思惟する程神より遠かると言つたが、ペスタロツチも亦單なる思惟によりて神を見出し得るものとは思はない。而かもルソーよりは一層積極的に宗教の教育を論述して居るのである。道德の生活なくしては道德訓は無意義であり、宗教の生活なくしては宗教的教訓は無駄である。「生活は陶冶す」といふペスタロツチの教育原理は宗教々育の上にも根本原理として活躍して居るのである。而かも其根源は母子の相互接觸の生活である。子供の宗教心の芽生は神を信ずる母の生活に觸れたる時に始まるのである。子供は自分の信ずる母が信ずるものを信じ、自分の愛する母が愛するものを愛することになるのは子供

の自然である。ナトルプが共存生活の根源を母子の間の愛情に見出して居るのも其私淑するペスタロッチーの教育原理に基く所があると思はるゝのである。

四

要するにペスタロッチーにありては徳性發展の過程に應じて宗教生活の發展の姿を見出したたのであるが、彼にありては徳性夫れ自身の發展はまた神への信仰によりて可能となるのである。主觀内部の統一、客觀と主觀の統一、此を含めての主觀の-highき深き統一としての内面生活の靜平は彼にありては純なる徳性夫れ自身の世界であると共に、また眞實の宗教の生活である。此内面生活の靜平の源泉は神への信仰の中に存し、そして此内面生活の靜平はまた内面的秩序の源泉である。内面的秩序は吾々の諸力の正しき活用の源泉であり、諸力の正しき活用は躰かて此等の諸力の發達の源泉であり、また此等諸力を智慧にまで陶冶する源泉であり、眞理の生活としての智慧は人間の惠福の源泉であるのである。神への信仰は實に凡ての智慧、凡ての惠福の源泉であり、人間性の純なる陶冶の自然の道程であるのである。(4) 而かも彼の神は超越神ではなく、人間によりて人間の中に見出たさるゝのである。ナ

ルトブは一切文化の根源としての感情の無限に宗教の生活を見出したしたが、(5) ペスタロッチーは人間の眞の自我としての自我活動の中に神を見出したたのである。人間性の心眼であり徳性發展の根源である所の自我活動を信するものは神を信するものであるのである。自我活動は彼にありては自律的生活の根源であるが、其原本的な内容は宗教的徳徳であり又道徳的宗教である。此無限にして盡きざる二相一體の生活を實現する無限の努力が教育の中心問題である。

(註) 1 Pestalozzi's Werke, Seyffarth 1899. IV B. 459 S.

2 es. ibid VII B. 413—519 S.

3 ibid III B. 320 S.

4 Natorp—Religion i. d. Grenzen d. Humanität. 1908. 27—43s.